



盛田 常夫

Morita Tsuneo

人ひと

●略歴/1947年富山県生まれ。国際基督教大学教養学部卒業、一橋大学大学院経済学研究科博士課程修了。法政大学社会学部教授、在ハンガリー日本大使館専門調査員、野村総合研究所顧問を経て、現在、立山ハンガリー研究所社長。著書・訳書：「体制転換の経済学」（新世社、1994年）、「ハンガリー改革史」（日本評論社、1990年）、コルナイ著「[不足]の政治経済学」（訳、岩波書店、1986年）、マルクス著「異星人伝説」（訳、日本評論社、2000年）など。URL：<http://morita.tateyama.hu>

ハンガリーの理論力と日本の工業力をつなぎたい

「ハンガリーの科学研究が理論的にいくら優れていたとしても、それを製品開発へとつないでゆくような窓口がハンガリー側と日本側の両方で必要なんです」

盛田さんは年に1、2回ハンガリーから日本に帰国し、現在の勤務先の本社がある富山を訪れる。富山県高岡市は郷里だ。

「立山科学グループは電子部品や通信機器を製造する立山科学工業と、生産機械を開発製造する立山マシンとを中核にしています。ハンガリー立山研究所は、アカデミックな研究所ではなくてソフトウェアの開発をやる会社ですが、それだけにとどまらず日本サイドの需要に応じて人材を発掘・供給する拠点です。次世代の技術はナノテク。ここ10年で電子部品の製造も様変わりするはず。理論的なところで強さを発揮するハンガリーの大学や研究所の成果と、日本の製品開発力とを結びつけるのが私の仕事です。1997年設立のこの会社は、立山グループ全体の技術発展や製品開発に役立てることが目的だったのですが、日本側の窓口機能が弱く、ハンガリーの会社は、事実上、ソフト開発会社になってしまいました。しかし今年、筑波の産総研に日本サイドの窓口となる立山ミニラボを設立して日本側の受け皿ができて、これからはナノテク関連の開発研究や人材交流ができそうです」

盛田さんは、1989年の中・東欧諸国の激動の時期、在ハンガリー日本大使館の専門調査員を務めていた。その後、日本の大学に戻ることなく、野村総研を経て、ブダペストを拠点とする実業の世界を選んだ。現在は経済学を教える仕事からは離れている。

「個別の経済分析ツールをいくら勉強しても、それで経済を勉強したことにはならないでしょう。日本でもハンガリーでも政治や経済の体制が変わろうとしているときには、大局的に社会がどう動いているのか、政治と経済とがどう絡み合っているのかを見通せるような視点がないと的確な分析はできません。技術ツールでは社会の大きな変動を分析できません。社会の深いところへ届くような、幅の広い分析力を身に付けてほしいですね」